



TITLE:

ミクロロギーと普遍史ーベンヤ
ミンの歴史哲学(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

宇和川, 雄

CITATION:

宇和川, 雄. ミクロロギーと普遍史ーベンヤミンの歴史哲学. 京都大学
, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19429>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

| | | | |
|---|------------------------|----|-------|
| 京都大学 | 博士（文学） | 氏名 | 宇和川 雄 |
| 論文題目 | ミクロロギーと普遍史——ベンヤミンの歴史哲学 | | |
| <p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、20世紀前半のドイツの批評家ヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）の歴史哲学の形成過程を、「ミクロロギー」と「普遍史」という二つの概念を手がかりにして明らかにしようとする試みである。全体は、序論と5つの章から成っている。</p> <p>序論では、ベンヤミンの受容史をふまえつつ、本論文の主題を提示する。ベンヤミンの歴史哲学が、特異な「ミクロロギー的方法」にもとづくものであることは、アドルノをはじめとする友人たちによって早くから指摘されてきた。「ミクロロギー」とは、そもそも19世紀の時点では、学問における行き過ぎた些事拘泥を諷めるための言葉だったが、アドルノはそれを、ベンヤミンの哲学に固有の反体系性・断片性を表すためのひとつのキーワードとして使っている。アドルノによれば、ベンヤミンにおいてこの方法は、第一次世界大戦後のドイツで生じた体系哲学からの脱出の試みのひとつの戦略として選び取られたものだった。アドルノはしかし、この方法がどのような思想史的伝統および同時代言説のなかで形成されたものであるのか、ほとんど説明していない。ミクロロギー的方法にもとづくベンヤミンの歴史哲学は、今日では巨視的な歴史哲学に対抗する「ミクロストリア」の先駆として評価されているが、その諸テーマが十分に解明されているとは言い難い。本論文ではまず、これまでもっぱらベンヤミンに固有の「感覚」として論じられてきたミクロロギー的方法の形成過程をたどり、「境界事例」に焦点をあてるベンヤミンの歴史哲学の理論と実践の再検証を試みる。もっとも、ベンヤミンの歴史哲学のテーマは多岐にわたり、学生時代から亡命時代におよぶその省察の範囲は、必ずしもミクロロギーの枠におさまるものではない。例えば、歴史を自然のように眺める視座、歴史が恒常的な破局であるという考え方、そして、技術による自然支配と進歩の幻想に対する批判。そこにはさらに、ミクロロギー的な歴史哲学とは一見相容れない「普遍史」の理念さえもが含まれている。ミクロロギー的な歴史哲学の実践から普遍史の理念の構築まで、ベンヤミンの歴史哲学の緊張に満ちた生成を明らかにすること、それが本論文の主題である。</p> <p>第一章では、ゲオルゲ・クライスを代表する批評家であるフリードリヒ・グンドルフのゲシュタルト理論との競合を通して、ベンヤミンがミクロロギー的な歴史観を構築してゆく過程を明らかにする。ゲオルゲ・クライスは、当時のドイツで勢力をもっていた詩人サークルであり、ベンヤミンは共感と反感を交えつつ、このサークルから生涯にわたり大きな影響を受けていた。ゲーテをドイツ文化の英雄および造形者と見なし、その造形力の本質である「ゲシュタルト」の解明を主題としたグンドルフの</p> | | | |

『ゲーテ』（1916）は、第一次世界大戦中のドイツでベストセラーになった。それに対してベンヤミンは、数年後に書きあげた『ゲーテの〈親和力〉』（1922）のなかで、グンドルフの文学理論に対する全面的な批判を展開することになる。ベンヤミンによれば、グンドルフは不明瞭なゲーテの本質を前提とし、さらに歴史上の人物であるゲーテの生を神話的な生に歪曲するという誤謬を犯している。ベンヤミンの批判の矛先は、グンドルフの文学理論（ゲシュタルト理論）の根幹を成す本質主義・全体論・ナショナリズムに向けられている。1930年代の『ドイツの人々』の構想は、まさにこのグンドルフ批判の延長線上で生まれてきたものだった。これは18世紀後半から19世紀後半までのドイツの人々の手紙をまとめた書簡集であり、1936年に中立国スイスの出版社から刊行された。この本を、ナチズムの手によるドイツ精神の荒廃に対する異議申し立ての試みと評したのはアドルノだが、ベンヤミンにはそれとは別にもうひとつ、ゲオルゲ・クライスとの対決という狙いがあった。ベンヤミンによれば、この書簡集の狙いは、「秘密のドイツ」を追い求めるゲオルゲ・クライスの試みに対抗して、ドイツ古典主義のこれまで語られてこなかった一面を明らかにすることにあった。ベンヤミンがそこで詩や戯曲ではなく、「手紙」という形式を取りあげたのは、それがゲオルゲ・クライス（とくにフリードリヒ・グンドルフ）の文学理論のなかで軽視されていたものだからである。ゲーテをはじめとするドイツの詩人の英雄列伝を叙述したグンドルフに対して、ベンヤミンはこの書簡集のなかでドイツから追放された詩人や思想家、およびその友人や恋人の手紙を意図的に選び、そのモンタージュによって「隠蔽されたドイツ」のイメージを浮かびあがらせようとした。それまで顧みられてこなかった周辺的な事象を取りあげ、モンタージュによって歴史の隠れたイメージを提示し、現在と過去のアクチュアルな符丁を明らかにするというベンヤミンの方法は、ここにそのひとつの具体例を見出すことができる。

第二章では、ベンヤミンの「ミクロロギ的・文献学的感覚」（E・ブロッホ）に焦点をあてる。ベンヤミンは早くから歴史哲学の諸問題に関心を抱いていたが、1910年代のベンヤミンの著作のなかには、ミクロロギ的方法はまだはっきりとは現れていない。ベンヤミンのミクロロギーは、『ゲーテの〈親和力〉』以降のテキスト批評・文献学の実践のなかで培われたものであり、ベンヤミンがそれを新しい歴史研究の試金石と見なすようになるのは、もっと後になってからのことである。ベンヤミンは、1933年のエッセイのなかで、新しい歴史研究のモットーとして、「些末なものへの畏敬心」を掲げている。この言葉はそもそも、グリム兄弟の若き日の論文集『古ドイツの森』（第1巻1813）に対して同時代人から寄せられた、些末な伝承を蒐集するグリム兄弟の文献学の方法に対する批判の言葉だった。この言葉をめぐる評価が変わるのは、1860年代のことである。ヴィルヘルム・シェーラーは、グリム兄弟の「些末なものへの畏敬心」が、従来の美学で周辺的に扱われてきた古い伝承を蒐集する試みであったことを高く評価し、その蒐集の理念にもとづいて、古代から近代にいたるま

でのドイツ文学の全体を網羅する「普遍史研究」を確立した。それに対して、1930年代にシェーラー学派の普遍史研究を批判し、グリムの「真の文献学の精神」への回帰を唱えたのがベンヤミンだった。ベンヤミンによれば、新しい歴史研究において重要になるのは、もはや「偉大なる全体」や「包括的な連関」を見て取る眼差しではない。「些末なものへの畏敬心」、すなわちそれまで周辺的に扱われてきた「境界事例」に沈潜する精神こそが重要なのだ。ベンヤミンはこの新しい歴史研究の一例として、同時代のヴァールブルク学派と、アロイス・リーグルの衣鉢を継ぐヴィーン美術史学派を挙げている。この章では、「些末なものへの畏敬心」という言葉の解釈が、グリム兄弟の時代からベンヤミンにいたるまでどのように変わってきたのかを追跡し、ベンヤミンのミクロロジー的方法の思想史的位置づけを明らかにする。

第三章では、ベンヤミンの原型論批判を取りあげる。1930年代の半ば、ベンヤミンは、彼の歴史哲学の集大成となるはずだった『パサージュ論』の執筆を進めるうえで、ひとつの課題につきあたる。すなわち、パサージュをはじめとする19世紀の建築様式を資本主義社会の「集合的無意識」として分析する彼の試みが、カール・グスタフ・ユングやルートヴィヒ・クラークスの原型論とどのように区別されるのか。この点についてアドルノから指摘を受けたベンヤミンは、その後「太古的なイメージの理論家」との対決を意識するようになる。ユングとクラークスの名が挙がっているが、ベンヤミンとの関係が深いのはクラークスである。ベンヤミンは学生時代からクラークスの思想に傾倒し、とくに1922年に刊行されベストセラーになった『宇宙生成的エロス』からは大きな影響を受けていた。現代を「精神」の支配によって「魂」の失われてしまった不毛な時代と考えていたクラークスは、この本のなかで先史時代の人間の陶酔的・エロスの意識状態の解明を試み、その答えを「イメージの現実性」に求めている。この太古的なイメージ論に対するベンヤミンの批判は、まとまったかたちでは残されていない。しかしその痕跡は、1930年頃に書かれたいくつかのエッセイのなかにすでに見出すことができる。例えば『写真小史』（1931）のなかで、ベンヤミンはクラークスが説くようなアウラの「イメージ」の経験が現代において衰退しつつあることを指摘したうえで、写真（複製技術）によって生み出される「模像」の非アウラの経験の積極的な評価を試みている。アドルノによれば、ベンヤミンの歴史哲学のひとつの特徴は、それが「写真のスナップショット的経験」を明確に意識して構成されている点にある。この章では、『写真小史』を手がかりに、クラークスとベンヤミンのイメージ論および歴史哲学の差異を明らかにする。

第四章では、ベンヤミンの技術論を、進歩史観に対する批判として読み直す。ベンヤミンは、1930年代後半に取り組んだエッセイ『技術的複製可能性の時代の芸術作品』のなかで、20世紀の帝国主義戦争を「技術の反乱」と呼んでいる。技術の進歩は、一般には社会の進歩と考えられているが、ベンヤミンによれば、現代の技術はもはや制御不能なものとして人間と対立している。帝国主義戦争の殲滅戦においてはっ

きりと現れているように、現代の技術は、地球規模での人類の破滅を実現しつつある。ゆえにベンヤミンは『歴史哲学テーゼ』（1940）のなかで、技術の進歩が称揚される一方で、社会の退歩が見落とされてきたことに警鐘を鳴らしている。ベンヤミンは、単純な技術否定にも技術崇拝にも与さない。その関心は一貫して、技術と人間、技術と社会の破綻した関係の再構築に向けられている。帝国主義戦争における「技術の反乱」を考えるうえで、ベンヤミンが下敷きにしたのは、ジェルジ・ルカーチの物象化論だった。ルカーチは、『小説の理論』（1916）と『歴史と階級意識』（1923）のなかで、人間が生み出した文化・社会が、硬直した、よそよそしい「第二の自然」になっているという事態のうちに、近代の「疎外」を見出していた。ベンヤミンは、『技術的複製可能性の時代の芸術作品』のなかで、「技術化と疎外」の現象を考えるために、このルカーチの「第二の自然」の概念を——マルクス主義の諸概念とともに——援用している。すなわち、ベンヤミンは、人間が〈第二の自然としての技術〉をもはや我が物にできていないという認識から出発して、この事態を乗り越えることを、新しい芸術の課題に掲げている。そこでベンヤミンが目指しているのは、ファシズムの戦争賛美・技術崇拝に対抗する芸術概念の構築である。ベンヤミンはさらに『歴史哲学テーゼ』のなかで、19世紀以降のドイツの政治において、進歩思想が「社会の退歩」という現実を「技術の進歩」という幻想で覆い隠すことによって生きながらえてきたことを批判し、歴史の概念の再構築に取り組んでいる。この章では、ヘーゲルからルカーチ、アドルノ、ベンヤミンへと続く「第二の自然」の概念史を紐解き、ベンヤミンの技術論を、進歩史観に対する反論として読み直す。

第五章では、ベンヤミンが進歩史観への批判と並行して模索していた歴史観の一例として、「普遍史のメシア的な理念」について考察する。「普遍史」とはそもそも聖書の記述にもとづいて人類史を解釈するキリスト教的歴史叙述の一形式であり、その伝統は古代ローマにまでさかのぼる。キリスト教的な「普遍史」から科学的な「世界史」への転換は、ドイツでは18世紀後半からはじまるが、「普遍史」という名称は、その後も世俗化されたパノラマ的な歴史叙述の一形式として残り続ける。この19世紀後半に流行した普遍史研究をベンヤミンが批判し、それに対抗するために独自のミクロロジーの方法をつくりあげていったことは、すでに第二章で確認した。ベンヤミンは、『歴史哲学テーゼ』のなかでふたたびこの19世紀的な普遍史の方法を批判しつつ、その一方で、従来の普遍史とは異なる「普遍史のメシア的な理念」を思考する可能性に繰り返し言及している。ベンヤミンによれば、万人によって理解される普遍的な歴史は決して思考不可能なものではなく、その手がかりは、「普遍言語」の理念のなかに求めることができる。あらゆる言語を内包し、無限の発展可能性を秘めた言語形式についてのベンヤミンの考察の跡は、すでに彼の博士論文『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』（1919）のなかに確認することができる。ベンヤミンは、この博士論文の隠れた主題として、「ロマン主義的メシアニズム」、すなわち初期フ

リードリヒ・シュレーゲルにおけるメシアニズム思想の解明に取り組んでいた。『アテネウム』（1798-1800）時代のシュレーゲルは、一方では近代史の目標として「神の国」の実現を掲げ、他方では無限に拡大する「発展的な普遍詩」が近代文学の理念であることを主張していた。ベンヤミンは、この初期シュレーゲルにおける歴史哲学とポエジー論（言語哲学）の構造が同一であることに注目し、「発展的な普遍詩」の理念のなかに書き込まれた歴史哲学の構造、すなわち「ロマン主義的メシアニズム」の構造を明らかにすることを試みている。この試みは、博士論文のなかでは十分に展開されないままに終わったが、長い潜伏期間を経て、『歴史哲学テーゼ』のなかでふたたび浮上してくる。ベンヤミンは、シュレーゲルからおよそ一世紀の時を経て、万人によって理解される「普遍史」の理念を、「普遍言語」の理念にもとづいて再生しようとした。ベンヤミンの考える「普遍史」は、一部の民族、一部の階級、一部の国家、一部の人々にとって理解されるものではない。ベンヤミンによれば、「普遍史」とは万人によって理解される歴史であり、それはつまり「進歩」の物語のなかで語られてこなかったすべてのもの、すなわち「抑圧されてきた者たち」が解放されたときにはじめて可能となる。ゆえにベンヤミンは、それを「人類の希望」を表すひとつの指標、あるいは「祝祭の言語」とも表現している。「普遍史」とはすなわち、それまで周辺的に扱われてきたものに焦点をあてるベンヤミンのミクロロギー的方法、あるいは「個物の救済」の思想を人類史へと拡張し、極限まで突き詰めたものにほかならない。もっともそれは、あくまでユートピア的な理念にとどまっていて、この普遍史の理念を具体的に叙述することができなかったところにベンヤミンの限界があった。しかし、このユートピア的な理念のなかには、シュレーゲルにおいて懐胎されながら、その後忘れられていた言語哲学と歴史哲学の総合のひとつの試みを、そしてベンヤミンの「個物の救済」の思想のひとつの精華を見出すことができる。

(論文審査の結果の要旨)

20世紀前半のドイツの批評家ヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)が、その短い生涯のあいだに遺した著作は、文学、芸術、思想、歴史、言語などの幅広い分野にわたっており、現代の学際的な文化研究の先駆として、近年再評価が進んでいる。そのなかでも、ベンヤミンの歴史観を論じるさいには、彼の遺稿である『歴史哲学テーゼ』(1940)が拠り所とされることが多かった。それに対して論者は、『歴史哲学テーゼ』は、ベンヤミンの歴史哲学の集大成として構想されながらも未完に終わった『パサージュ論』の理論的概要をなすものであり、この著作のみからベンヤミンの歴史哲学を抽出しようとするれば、その思想の上澄みだけを掬うことになりかねないと主張する。本論文は、『パサージュ論』の構想以前にまで時代をさかのぼり、歴史とは一見かわり合えないさまざまなテーマにかんするベンヤミンの著作を読みとき、彼が同時代や過去のさまざまな思想潮流とのあいだにかわした対話と対決の跡をたどることによって、ベンヤミンの歴史哲学の形成過程を、「ミクロロジー」と「普遍史」という二つの視点から浮き彫りにしようとする試みである。

本論文のすぐれた学問的成果として、次の3点を挙げることができる。

(1) ベンヤミンの歴史叙述が、世界史的な大事件ではなく、それまで見過ごされてきた出来事の細部に焦点をあてる「ミクロロジー的方法」にもとづいていることは、すでに早くから指摘されていたが、その成立過程が具体的に解明されることは少なかった。論者は、この方法が同時代の思想状況との対決のなかから生み出されたものであることを、彼のさまざまな著作にそくして跡づけている。第一章では、ゲオルゲ・クライスを代表する批評家フリードリヒ・グンドルフ(1880-1931)に対するベンヤミンの批判が取り上げられる。グンドルフはその著書『ゲーテ』(1916)において、ゲーテをドイツ文化の造形者とみなし、その造形力の本質をなす「ゲシュタルト(形態)」の解明を試みたが、ベンヤミンは論文『ゲーテの〈親和力〉』(1922)によって、グンドルフの理論がはらむ本質主義・全体論・ナショナリズムを鋭く批判した。論者は、ベンヤミンが編纂した書簡集『ドイツの人々』(1936)を、彼のグンドルフ批判の延長線上に位置づけ、歴史のなかに埋もれてしまった人々の姿を浮かび上がらせる「ミクロロジー」の方法の実践を、そこに見出している。第三章では、ベンヤミンとルートヴィヒ・クラークス(1872-1956)のイメージ論が比較対照される。クラークスは著書『宇宙生成的エロス』(1922)のなかで、「精神」の支配によって「魂」が失われた現代に、先史時代の人間における「イメージの現実性」を対置した。論者はベンヤミンの『写真小史』(1931)のうちに、クラークスに対する批判を読みとっている。すなわち、太古的なイメージの世界への回帰をめざしたクラークスとは対照的に、ベンヤミンはアウラを喪失した「模像」としての複製芸術のうちに、隠された歴史の痕跡を読みとるための新たな可能性を見出そうとしたのである。

(2) だが、論者によれば、ベンヤミンの歴史哲学には、「ミクロロジー」とは一見相容れない「普遍史」の理念もまた含まれているという。第五章で論者は、ベンヤミ

ンが『歴史哲学テーゼ』のなかで、19世紀的なパノラマ的歴史叙述の方法としての「普遍史」を批判する一方で、それとは異なった「普遍史」の可能性を提示していることに着目する。それは、万人によって理解される歴史であり、歴史のなかで「抑圧されてきた者たち」の解放によって初めて可能になるものだという。すなわち、ベンヤミンのいう「普遍史」とは、彼の「ミクロロジー」の方法を人類史へと拡張し、極限にまで突き詰めたものにほかならず、こうして彼の歴史哲学は、「ミクロロジー」と「普遍史」という一見対極をなす二つの歴史観を統合する試みとして捉え直されるのである。

(3) 本論文のもう一つのすぐれた特色は、ベンヤミンの歴史哲学を、近代ドイツの精神史のなかに位置づけた点にある。第二章では、「些末なものへの畏敬心」という言葉が、19世紀初頭から20世紀前半にかけて被った意味の変遷がたどられる。1810年代にグリム兄弟（兄1785-1863、弟1786-1859）の文献学に対する批判として発せられたこの言葉は、1860年代にヴィルヘルム・シェーラー（1841-86）によって新しい文学史記述の理念へと高められたのち、1930年代にシェーラー学派を批判したベンヤミンが、グリム兄弟の「真の文献学の精神」への回帰を唱えるさいの拠り所となったというのである。第四章では、ヘーゲル（1770-1831）からルカーチ（1885-1971）、アドルノ（1903-69）へと続く「第二の自然」の概念史をふまえて、ベンヤミンの技術論が、進歩史観に対する批判として読み直される。第五章では、ドイツ・ロマン主義の理論的指導者フリードリヒ・シュレーゲル（1772-1829）のキリスト教的な「普遍史」の理念との対話を通じて、ベンヤミンが「普遍言語」による「普遍史」の再生という構想を生み出していった過程が跡づけられる。これらの章は、たんにベンヤミン研究に新たな知見をもたらすのみならず、ベンヤミンを介してドイツ精神史の隠れた水脈を掘りおこす試みとして、高い学術的価値をもつものである。

むろん、本論文にもさらに望まれる点がないわけではない。ベンヤミンの歴史哲学の全体像を明らかにするためには、未完に終わった『パサージュ論』の分析が必要であろう。また、ベンヤミンにおける「普遍史」と「普遍言語」の関係を解明するためには、彼の言語論にかんする考察が望まれる。だが、こうした点については、論者の今後の研鑽に期待することにしたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成28年2月17日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。